

三川内川（宮崎県）

毎年夏休みには、家族で母の祖母のところに遊びに行く。話題の知事さんのおかげで今一番ホットな宮崎県の、北浦町という田舎町である。私も生まれてから一ヵ月半この町で過ごした。

その祖母の家から車で20分ほどのところに、「三川内川」はある。<ミカウチガワ>と読む。家族で宮崎に行くと、海と交互に毎日泳ぎに行く川だ。車を止めるとまず、自然休養村センター清流荘という建物がある。山の中の、市の小さな宿泊施設だが、泊まっている人を見たことはあまりない。そこから山道に無理やり作ったような細い丸太の階段を下っていくと、木々が生い茂る中、キャンプができる平らな土地がある。更に階段を下りると川岸に到着する。木陰にシートを引いて水着に着替えたなら準備OK、水までダッシュ！川岸に敷き詰められた小石は、晴れた日はまるで焼き石で、素足ではゆっくり歩いてなどいられない。ただし川に着くと急に冷たいから注意だ。水は非常に冷たい。川は徐々に深くなるが、コンクリートの堰で足場が設けられているので水深1メートルほどになるところもあり、子どもも足をつけて遊ぶことができる。川幅は20メートル以上あり、ちょうど飛び込み台になるような大きな岩もある。流れは晴れていれば緩やかなので浮き輪で浮くのちょうどいい。



最近延岡市と合併したため、市のホームページに清流荘の紹介が少しある。残念ながら三川内川についての記述はないが、清流荘は周囲を緑あふれる山々にかこまれ自然環境に恵まれた静かな「行楽地」、センターでは「自然豊かな季節の料理が満喫できる」と紹介されている。行楽地などと書かれると少々疑問を抱いてしまうのだが。私たちが遊ぶとき、他に3～4家族来ていたら、今日はこんでいるね、という感じである。うちの家族しかいないときはそれこそ、まさにプライベートリヴァーだ。清流荘にも頻繁に客が泊まっている様子はなく、母も、近所の老人会が集まっているところしかみたことがないという。

そんな、田舎の中の更に山奥を流れる三川内川だからこそできることがたくさんある。私はこの川で母に泳ぎを教わった。流れに垂直に泳ぐのは大変だった覚えがある。川の端から端に泳ぐ特訓をしたら、流れのない学校のプールでは軽々と泳げた。たまに川上から川下にクロールして、自分がうまくなった気になったりもした。兄弟でよく鬼ごっこもした。深いところにもぐって行って底の石を拾ってきたり、シンクロナイズドスイ

ミングのふりをして遊んだり。海より冷たいけど、溺れてもしょっぱくない川が大好きだった。

きれいな川だから、魚や貝も住みやすいのだろう。たくさんの生き物がいる。岩の間や足場の堰の間にはタニシやカワニナがいる。水の浅いところにじっと座っていると、足の周りに、黒くて細いミニチュアおたまじゃくしのようなか細い魚がたくさん集まってくる。めだかより少し大きい小魚が群れで泳いでいて、捕まえようと真剣に追いかけたがいつも失敗した。試しに網をしかけみたこともあった。だが網の目より大きい魚はいなかったようで、結果は残念だった。

祖母の家からは今でこそ車で20分だが、母が子供の頃はまだ道が整備されていなく、毎日泳ぎに通えるような近さではなかったという。清流荘に行く途中に中学校があるのだが、それは母の通っていた北浦の中学校の分校で、遠すぎて通うのが大変なため後から設立されたらしい。それくらい町から離れたところだった。しかしたまに川に行くと、子供がたくさん遊んでいたという。今となっては過疎地域だが、昔はあの山奥にもそれなりに人が住んでいたのだ。驚いたのは、その分校の生徒にとっては三川内川がプールだったということ。自然の川での授業。魚と一緒に泳ぎの練習。川底からきれいな石を拾う潜りの訓練。なんて贅沢な！宝探しとって、塩素漬けのプールの底から先生の投げたプラスチックの石を拾わなくてはならなかった私たちがかわいそうになる。因みに、昔母の学校のプールは川でもなく、なんと海だったらしい。溺れたらしょっぱいが、そんなの今ではプールも同じである。危険は伴うが一番現実的な訓練だし、波のプールのようでもっと広いし、うらやましい限りだ。

昔と何も変わっていないものもある。三川内川それ自体だ。日本中で河川の汚染、水質汚濁と叫ばれているのに、この川のきれいさはなんだろう、と不思議なくらいだ。ゴミが落ちているのもみたことがない。人がいない山奥だから当然といえば当然だが。あの辺りの人口密度は極端に低いだろうと思う。先ほども書いたが、別に行楽地というほどでもないから、遊びに行くのは恐らく私の家族と同じように、昔の川を知っている人の家族や親戚だけなのだろう。あそこに“ふるさと”を感じる人たちだから、汚すはずはないし、きっと大切に大切に使うのだ。

身内の川になっている限り汚れないことは喜ばしいことである反面、リゾート化されていないそのままの自然を、次の世代の子供に知ってもらわないのはもったいなく思う。家族で自然を楽しむといううたい文句のレジャーパークの多くは人工の自然だ。ホテルの目の前にある海や川も、人が人をよぶために作られた人工の自然である。そんなところにしか行ったことのない子供は、本当の自然を知らない。私たちの世代でさえそういう人が多い気がする。そうなれば、環境問題なんて人事かもしれない。自分の、豊かで便利な生活を変えてまで自然を守ろうとは思えないかもしれない。行動を変えるには、自分で経験するしかないのだ。都会で育っている小さい子供たちに、一度この川で遊んでみてほしいものだ。冷たくて透き通った水、ゴーグルをして顔をつければ魚が目に入

る感激。私は幸いにも、この感激を小さいころから味わい続けていたから、きれいな川を守りたいと思えるし、きれいな地球を取り戻すためにできることはやりたいと思える。プールでしか泳いだことのない子供たちが増えれば、リゾートの海を本当の海の姿だと勘違いする子供たちばかりになれば、いくら環境問題を叫んだところで何も変わらない。

三川内川は今でも、きれいなままの姿を保つことができている。ニュースになる他の川のようにゴミが流れるわけもなければ、魚が逃げたり死んだりするわけでもない。堤防で人工の川のようになることもない。昔と変わらないまま、静かに流れている。

そういう姿のままですらわれるのも、人間が使わなくなったからだ。寂しいことだが、人が寄り付かない自然は、壊されない。過疎化で人はいないし、夏にいまだに遊びに来る数家族以外には知られてもいない。夏にならなければ誰も思い出しもしないかもしれない。母が子供のころのように、周りに人がたくさんいて、子供たちが遊びに来て、にぎやかな時に比べて、川は幸せなのだろうか。

こうなると、人間と自然との共存は可能か、という議論になる。私は可能であると言いたい、この現状を考慮するとそう言い切るのは難しい。三川内川だって、これからもきれいなまま保たれる保証は全くない。

破壊はどんどん進んでいく。今すべきことはなんなのか。一人一人が真剣に考えなければいけない、行動しなければいけない段階にきているのだ。母が子供のときも、私が真剣にクロールの特訓をしたときも、きっと今年も、同じ姿で流れている川。夏のよく晴れた、セミがうるさい日がよく似合う、冷たく緩やかな川。そんなきれいな川を保つためにも、きちんと向き合って、行動につなげなければ。このエッセイを通して、改めて考えさせられた。

●WORK CITE●

<http://www.city.nobeoka.miyazaki.jp/kanko/kitaura/seiryusou.html>